

動作主名詞とそれを修飾する形容詞との意味的關係

月 足 亜由美

On the Semantic Relations of Agentive Nominals and Modifying Adjectives

TSUKIASHI Ayumi

Abstract : The semantic diversity of agentive nominals and their modifying adjectives has been widely discussed. This paper aims to illustrate the semantic properties of agentive nominals and what aspects of them adjectives modify and how. I observe the differences between “role-defining” and “situationally-defined” agentive nominals and discuss on what conditions those nominals are acceptable and interpretable in Section 2. In applying Prototype Theory, agentive nominals are considered as peripheral members of the noun category, due to their grammatical and semantic peculiarity. Furthermore, within the category of agentive nominals itself, we find some examples more central and prototypical than others. In 3.2, I point out that a wide range of “adjective and agentive nominal” combinations can be understood as comprising a continuum, depending on what attributes each adjective refers to within the frame or context invoked by the agentive nominals.

1. 序

形容詞の修飾のしかたとして、名詞の表す概念を修飾する「指示修飾 (reference modification)」, 名詞が指示する特定の「個」を修飾する「指示物修飾 (referent modification)」という区別がある (Bolinger 1967)。例えば *beautiful dancer* は前者の解釈ではダンサーとしての性質を問題にしており、踊る様が美しい、上手なダンサーだという意味であるが、後者の場合は指示される人物の容姿について言っていることになる。これに対し、*beautiful singer* は歌声が美しい歌手という解釈はできず、容姿が美しい歌手だという指示物修飾としての解釈しか許されない。別の形容詞で考えてみると、*good cook* は「腕の立つ料理人」という前者の解釈のほうが通例であるが、「善良な料理人」という人としての属性に言及する後者の解釈も可能である (岸本・菊池 2008: 108)。同様に、*good father* や *good teacher* でも、父親や教師としての属性を表している

という解釈が優勢で、人として善良だという意味は背景化されているように感じられる。

本稿では、名詞が動作主名詞である場合を対象とし、形容詞と名詞の意味構造を考えることにより、それぞれの組み合わせにおいてどのような修飾関係が見られるかという問題を中心に考察する。ここでの「動作主名詞」とは、*-er (-or)*, *-ist* などの接尾辞を持ち、意味的に何らかの動作的、動詞的概念を持つ名詞を指す。よって、*father* や *man*, *secretary* のような、動詞的概念を含まない単純なヒト名詞は対象から除外する¹⁾。

形容詞のタイプとしてもう一つ、*inherent adjective* (内在的形容詞) と *noninherent adjective* (非内在的形容詞) の違いがしばしば文法書などで挙げられる (Quirk et al. 1975, 安藤 2005)。前者は修飾する名詞の指示物を直接特徴づける、つまりその内在的な性質を表すのに対し、後者は名詞を直接特徴づけるのではなく、関連する事態の別の参与者 (*participant*) に認められた性質をその名詞につけて言語化する。例えば

1) この区分と呼称は影山 (2002) に従ったものである。

wooden cross はその十字架の内在的性質を述べているので前者の例, intelligent question では質問が intelligent なのではなく, 質問からうかがえる質問者の性質を表しているのが後者の例である。つまりここでは, 質問が行われているという事態の中の複数の参与者(質問者と質問)に評価を下し一方を言語化するという, メトニミーに基づくプロファイルシフトが行われていると言える。

形容詞と名詞はかなり自由に, お互いの意味の結合に矛盾や衝突がなければ組み合わせて使われ, よってこの非内在的形容詞の例はかなり高い頻度で生じる。本稿では, 形容詞は動作主名詞のどこをどのように修飾しているのかという問題を中心に検討するが, 各々の「形容詞+動作主名詞」の組み合わせにおいて, プロファイルシフトがどう生じているかを考える。

次節ではまず動作主名詞に異なる種類のものがあることを確認し, 動作主名詞は何を意味し, どのような状況のもとで生じるのかを検討する。プロトタイプ理論を適用すれば, 動作主名詞は名詞というカテゴリーのプロトタイプとは言えないことを 3.1 で確認し, 3.2 で形容詞が動作主名詞とどのような修飾関係にあるかを考察する。

2. 動作主名詞の意味

接尾辞の -er (-or) は造語力が高く, 動詞, 形容詞 (e.g. stranger, foreigner), 名詞 (philosopher, prisoner), 複合語 (trick-or-treater, six-footer) などに付いて名詞を作ることができる。cooler, farmer, gardener のように, どの品詞からの派生か判断し難いものもある。Evans & Green (2006) の例を見てみよう。

- (1) a. teacher
b. villager
c. toaster
d. best-seller (Evans & Green 2006: 36)

(1 a) と (1 c) はそれぞれ教える, パンなどを焼くという動詞的概念を含むが, (1 a) は人であるのに対し (1 c) はそのような機能を持つ器具である。(1 b) ではそこに住むという動詞的概念は背景に退き, 住む場所に接尾辞が付いている。また, (1 d) はよく売れるという性質を持つモノ(本)を表し, sell が表す動詞の意味合いは「売れる」という, 行為というよりは安定的, 状態的な属性と言える。Evans & Green (2006:

37) はこのように -er は多義を示し, -er の共通の意味を取り出すとすれば「それを定義づける能力や属性 (a defining functional ability or attribute) を持つ」というものだとしている。(1 a) と (1 c) では教える, 焼くといった「能力」, (1 b) (1 d) はある場所に住む, よく売れるという「属性」をそれぞれの -er が付与していると考ええる。

動作主名詞について特に興味深いのは, 基礎となる行為・事象のどの参与者を取り上げて言語化したものであるかという点と, 動作主名詞が表す属性が恒常的なものかあるいは一時的なものであるかという点である。まず, 前者の問題点から考えてみよう。上の (1 c) が「トーストする人」ではなくその機能を持つ器具を表すのと同様に, その行為を行う際に用いる道具を言語化することは多い (e.g. eraser, grinder, stretcher, CD player, etc.)。一つの語が人(歩行者)と道具(歩行器)の両方の意味を持ち, 意味がコンテキストに依存する, 次のような例もある。

- (2) a. Tell that **walker** to keep off the grass.
b. My **walker** is broken again.

(Langacker 2008: 146)

seller は単独で用いられれば, 「売人」のことを指す。bookseller は本を売る人のことである。しかし, (1 d) の best-seller や good / big seller のように形容詞を伴えば, そのような「売れる」様態を持つ商品ということになる。つまり, sell の「売る」ではなく「売れる」という概念に属性が付与されていると言える。また, sleeper を考えてみると, 眠る人, 寝台車, 子どもの寝巻, まくら木, (映画や本の) 掘り出し物, (緊急時に備えて) 待機中のスパイといった多様な意味がある。「まくら木」以降の意味はメタファーによる拡張で生じたものと考えられるが, 「寝台車」「寝巻」の意味は, 寝る場所として, 寝るときに着るものとしてどんな可能性があるかといった私たちの百科事典的知識の中の「列車の中での寝る場所」「赤ちゃんが寝るときに着るもの」という非常に特化された部分に焦点を当てたものだと言える。西村・野矢 (2013) がメトニミーを「ある言語表現の複数の用法が, 単一の共有フレームを喚起しつつ, そのフレーム内の互いに異なる局面ないし段階を焦点化する現象」(西村・野矢 2013: 161) と定義しているが, これに当たる現象が起こっていると言える。

上で見たように, Evans & Green (2006) は -er の

意味を一般化するとすれば、基礎となる動詞・名詞・形容詞などの概念に「関連する属性を持つ」としていたが、それは一時的な属性ではなく、ある程度の期間にわたって継続的に認められる属性であると考えなければならない例がある。例えば、*singer* は「歌を上手く歌うことができ、それを職業としている人」を表し、その場でたまたま歌っている人のことは *a lady singing over there* などと表すのがふつうである。また、動詞の文は可能でも、その行為を何に対して、ある程度持続的にまたは一時的に行っているかにより、動作主名詞での言語化が可能な場合とそうでない場合がある。

- (3) a. He illustrates books ⇒
an illustrator of books, book-illustrator
b. He illustrates the problems ⇒
*an illustrator of problems, *problem-illustrator
(Roeper 1987: 296)

singer や *illustrator* のような語を単独で用いれば、上のように職業的または特別な技能を持つ動作主という意味だが、形容詞を伴う例えば *good / terrible / awful / poor singer* は職業的な歌手かどうかに関わらず、歌い手としての技能がどうであるかを示す。否定的な意味の形容詞と共起する場合は、職業的歌手以外の人を指すのが通例であろう。形容詞を伴う場合も、その人がそのような歌い手であるということは、継続的な事象として捉えられる。

singer が職業的な歌手、またはある種の歌い手という場合、ある程度継続的に「歌う人」を表すのに対し、Pustejovsky (1995)、影山 (2002) が論じるように、動作主名詞には「役割・職業など恒常的な性質を表すもの」と「その場でしか成り立たない一時的な性質」(影山 2002: 46) を表すものがあり、それぞれを Pustejovsky と影山は “role-defining” nominal (個体解釈名詞) (= 4 a), “situationally-defined” nominal (事態解釈名詞) (= 4 b) と呼ぶ。

- (4) a. The violinist is eating lunch at the cafeteria.
b. The passengers are eating lunch on the plane.
(Pustejovsky 1995: 229)

(4 a) の動作主名詞で指示される人は、潜在的にバイオリンを弾くという能力を持ちそれを職業としている人で、その時バイオリンを弾いている必要はない。一

方、(4 b) の「乗客」はその場で飛行機に乗っている人のことであり、降りてしまえば乗客ではなくなる。他の例として、影山は前者に *typist, linguist, doctor, carpenter, wife, mayor, alcoholic, smoker*, 後者に *pedestrian, fugitive, escapee, client, winner* を挙げている。

日本語のヒト名詞をアスペクト・テンスの面から論じ、一時的に「……している人」(事態解釈名詞) と恒常的・潜在的に「……する人」(個体解釈名詞) などの分類・分析を行った宮島 (1997) 自身も認めているように、この二つの区別はあいまいなことがある。例えば、音楽の「指揮者」は職業名であるが「行進の指揮者」「事件の指揮者」という文脈が与えられれば、臨時の「している人」を表す (宮島 1997: 167)。つまり、個体解釈名詞と事態解釈名詞それぞれに、影山が挙げているようなプロトタイプ的な例は見られても、動作主名詞によって必ずどちらに属するというようなことは言えないのである。*player* について見てみよう。

- (5) a. a player who would always sign autographs and chat with fans
b. The final whistle was greeted with triumphant cheers from players and spectators.
(以上 LDOCE: 下線は筆者)
c. the most influential player in the Republican nominating contest (COCA: 下線は筆者)
d. *a player with him (*from play with him*)
(Roeper 1987: 295: 下線は筆者)

(5 a) は職業としてのスポーツ選手、つまりその人の恒常的な属性を指す (個体解釈名詞) が、(5 b) はその場で試合に出てプレーした選手という意味 (事態解釈名詞) である。(5 c) の基盤となる事象はスポーツではないが、選挙をスポーツまたはゲーム、候補者を選手として捉えたもので、(5 b) と同じく事態解釈ができる。しかし、同じ *play* でも、ある一定の時間誰かと「遊ぶ」というだけの行為では、「遊んでいる人」という後者の捉え方ができず (5 d) の動作主名詞は容認されない。

speaker についても、「講演者・講師」「言語の話者」 (= 6 a, b), その場の「演説者」 (= 6 c) というように、スピーチをするとかある言語を話す人という意味で、恒常的または一時的に「する人」「している人」を表すが、誰かと「会話をする人、している人」とい

う意味で (6 d) のような動作主名詞を使うことはない。

- (6) a. As a speaker he was always in demand.
 b. Most English speakers elide the first 'd' in 'Wednesday'.
 c. All eyes were on the speaker, and nobody noticed me slip into the hall.
 (以上 LDOCE : 下線は筆者)
 d. *speaker to Bill
 (Roepers 1987 : 295 : 下線は筆者)

各々の動作主名詞が形容詞と共に起る場合については 3.2 節で改めて検討するが、動作主名詞の基盤となる動詞、事象のあり方によって、動作主名詞の容認度が異なるのは何に起因しているのだろうか。上で見たように、職業としてその行為を行っている、またある言語の話者であるという恒常的な属性を持っていると考えられる事象であれば問題なく動作主名詞が使えるが、一時的にそれを「している人」の意味の場合は、容認度にゆれがある。

基盤となる動詞が状態を表す場合も動作主名詞の間で容認度の違いが見られる。動詞が表す事態自体が状态的、継続的であるので、動作主名詞は「いつもそういう状態にある人 (そうする人)」という個体解釈のみを持つと考えられる。

- (7) a. *a wanter / *a hoper
 b. *a wanter to go / *a hoper to leave
 (Roepers 1987 : 295)
 (8) *John was the knower of that fact.
 (Evans & Green 2006 : 32)
 (9) a. ??I'm an admirer.²⁾
 b. I'm an admirer of his.
 c. I'm a big / great / secret admirer of his.
 (10) a. I'm not an economist but I am a thinker.
 (COCA)
 b. He's a brilliant / independent / deep / positive thinker.

(7) (8) の want, hope, know については、それを職業にしているとかいつも「望む人」「知る人」という捉え方ができず、動作主名詞の言語化は行われぬ。

(9) の admirer については、誰のどんなファンかを示す修飾語句が付かない (9 a) は容認度が低い。thinker についても形容詞を伴う例のほうが多いが、単独で用いる (10 a) のような例も多少は見られる。

(5 d) の *player with him, (6 d) の *speaker to Bill, (9 a) の *admirer の例から一般化できることは、何らかの属性や可能性 (potential) を持ってその行為を「する人」または「している人」という捉え方が成立するときのみ、動作主名詞が可能になるということである。「可能性」とはその場でその行為をしていなくても、行う能力や可能性を持っているという、個体解釈に関わる要素であり、それらが備わっている (5 a), (6 a, b) は容認される。また、*admirer が単独では用いられないのは、それだけでは属性についての情報量が不十分であるためだと考えられる。

以上 (5)~(10) で見たように、動作主名詞が観察されないケース、単独では現れないが形容詞や前置詞句を伴えば現れるケース、単独でも修飾語句を伴っても現れるケースがある。ここでプロトタイプの考え方を適用してみると、単独でも修飾語句を伴っても問題なく自由に出現できるのが動作主名詞のプロトタイプと言えるのだろうか。その他、文のどの位置に生起するか、どんな形容詞と共に起るかなどを考えることにより、プロトタイプと周辺事例について次節で考えてみる。

3. 形容詞 + 動作主名詞

3.1 形容詞・動作主名詞のプロトタイプと周辺事例

最近の研究で、〈動詞〉〈名詞〉といった品詞を含む文法的カテゴリーにおいても、中心的メンバーであるプロトタイプと周辺事例が存在するということが主張されている (Taylor 1998, 西村・野矢 2013)。動作主名詞のプロトタイプと周辺事例を見る前に、Taylor (1998), Aitchison (1994) の形容詞のプロトタイプについての議論を概観する。

Taylor (1998 : 182) は形容詞の典型例として、モノの安定的で恒常的な性質を表すような large, young, big を挙げている。典型例はいわゆる限定用法 (a large house) と叙述用法 (This house is large) の両方で用いられ、rather, (not) very, extremely のような程度を表す語句で修飾でき、比較する際の基準として機能することも可能である (This child is younger than that

2) コンテキストから誰の admirer かが明らかである場合は、of 以下が省略されたものとして許容される。

one) (Taylor 1998: 182)。このような特性を持たない、つまり限定用法または叙述用法でのみ現れる (11), very で修飾することができない (12) のような形容詞は周辺事例と見なされる。

- (11) a. a true scholar / *The scholar is true.
 b. *an asleep child / The child is asleep.
 (12) *the very wrong train, *the very right time

ここで形容詞 old について見てみよう。

- (13) Pauline was astonished to see –
 – an old woman (an aged woman)
 – an old friend (a long-standing friend)
 – her old boyfriend (a former boyfriend)
 – old Fred (Fred whom she knew well).
 (Aitchison 1994: 62)

よく知られるように old には上のような多義が見られるが, old を叙述用法 (The...is old) で用いれば「年をとっている」という一番目の意味になる。意味を変えずに限定用法でも叙述用法でも用いられる, つまり意味を保ったまま文の異なる位置に生じるということは, この意味が old の基本的・プロトタイプの意味であることを示している (Aitchison 1994: 62)。

多様な文法的位置や環境で生起できることがプロトタイプの特徴だとすれば, 動作主名詞は名詞としてはプロトタイプとは言えない。以下で見るように, 動作主名詞の生起する位置や構文, 文法的特徴にはある傾向が見られるからである。ただし, 動作主名詞の中でも違いが見られ, 以下のように属性を特定する形容詞や名詞なしで単独では出現しない (= 14 b), または出現しにくい例 (= 15 b)³⁾と, どちらでも問題なく生じる (16) のような例がある。少なくとも, 単独で出現しない動作主名詞は名詞のプロトタイプから外れていると予測される。

- (14) a. He's an early riser.
 b. *He's a riser.
 (15) a. He's a baseball player.
 b. ?He's a player.
 (16) a. He's a good liar.
 b. He's a liar.

また, 動作主名詞は以下の例のように “I am / You are / He (She) is . . .” といった be 叙述文の補部として生じる例が多いように思われる。

- (17) a. I'm a firm believer in old-fashioned good manners!
 (Tales of a Fourth Grade Nothing, p.18)
 b. You're such a worrier! (Fudge-a-mania, p.61)
 c. Maybe I'm not such a loser, I thought.
 (Fudge-a-mania, p.133)
 d. “You're a fussy eater,” Beverly said.
 (Superfudge, p.126)
 e. Aren't I a great pretender?
 (Superfudge, p.147)

(17) で用いられている動作主名詞が, 他動詞・自動詞構文あるいは be 叙述文の主語の位置に生じる傾向は相対的に見て低い。他の動作主名詞についても, その前に形容詞を伴う例は多いが, 形容詞を叙述用法で用いて動作主名詞を主語の位置に置くのは不可能であることが多い。

- (18) a. a big gambler / *The gambler is big.
 b. a hard worker / *The worker is hard.

動作主名詞というカテゴリの中でも, プロトタイプ効果が見られることが想定される。(14) で見た riser は「起きる人」という意味では early か late という限られた数少ない形容詞としか共起せず, 主語の位置にくる例も少ない。プロトタイプは隣接するカテゴリとの区別が容易にできるが, 周辺事例は他のカテゴリとの境界部分に位置するので, 隣接するカテゴリの性質を持つことがあり, どちらのカテゴリに属するのか判断が難しいことがある。例えば現在分詞や過去分詞は形容詞と同様の文法的ふるまいをするものが多く (cooked food, the food is cooked), 形容詞の下位カテゴリなのか別のカテゴリなのかという問題は残ったままである (Taylor 1998: 182)。動作主名詞の中には情動的に否定的な意味合いを含むものがあり, それらは Huddleston & Pullum (2002: 380–1) が “epithet” と呼び “an emotive expression which serves to indicate annoyance with the individual concerned rather than to give an objective description” と定義するものに

3) 例えば “Is he a coach or a player?” という質問に対する答えの文としては問題なく容認される。

近い。その名詞の例として Taylor (2012) は idiot, fool, bastard を挙げ、心情的な意味合いを持たない architect との対比を示している。

- (19) a. You fool!
 b. Bastard!
 c. Bernard just confessed, the idiot.
 d. You are such an idiot.
- (20) a. ??You architect!
 b. ??Architect!
 c. ??Bernard just confessed, the architect.
 d. ??You are such an architect.
- (Taylor 2012 : 90)

worrier, liar, loser のような動作主名詞は idiot などと似た否定的なニュアンスを持ち、これらを用いた以下の文も、人を嘲るときなどに高い頻度で使用される。一方、speaker や player といった動作主名詞をこれらの文で使おうとすると奇妙なことになる。

- (21) a. You liar / loser!
 b. Liar! / Loser!
 c. Bernard just confessed, the liar / loser.
 d. You are such a liar / loser / worrier.
- (22) a. ??You speaker!
 b. ??Speaker!
 c. ??Bernard just confessed, the speaker.
 d. ??You are such a speaker.

また stupid のような同様の意味合いを持つ形容詞もこのような表現で用いられる (e.g. You stupid!) ことを考えれば、これらの動作主名詞は名詞としては周辺事例であり、形容詞に近い性質を持っていると言える。

3.2 形容詞と動作主名詞との修飾関係

本節では、主に限定用法で使われる形容詞が動作主名詞のどこを、あるいは基礎となる動詞が表す事象のどの部分を修飾しているのかという問題点について考える。例えば tall / young / foreign player の各形容詞が人としての属性を表すのに対し、good / weak / influential player の場合はその人が play するときの様態について言及し、そういった行為や動作ができる人だということを意味する。この修飾の方法の違いについて、Pustejovsky (1995) は各形容詞が名詞のクオリア

構造の異なる側面について言及していることに起因すると説明する。

- (23) a. a fast typist
 b. a male typist (Pustejovsky 1995 : 89)

(23 a) は主要部名詞 typist の目的クオリア (Pustejovsky の用語では TELIC role), (23 b) は形式クオリア (FORMAL role) の属性にそれぞれ焦点を当てている。形式クオリアとはモノや人の外見上のかたちや色など、目的クオリアとはその目的や機能についての情報をそれぞれ提供するものである (小野 2005 : 25)。したがって (23 a) は type という動詞が表すプロセスをどう行う人か、つまりタイピストとしての能力に焦点を当てており、一方 (23 b) の形容詞は人としての属性を指したものである。

本節では、「形容詞 + 動作主名詞」の名詞句には、人としての属性を表したものと、動詞が表すプロセスの様態に言及しているものとがあるが、その間に中間的な事例が存在し、どこの属性に注目しているかは程度差を示すことを主張したい。よって、「形容詞 + 動作主名詞」の名詞句を人としての属性か、あるいは動詞のプロセスが行われる様態に着目したものかという二つに分類することは不可能で、多様な事例は全体として連続体を成すものと考えられる。連続体の両端に形式クオリアに焦点を当てたもの ((A)), 目的クオリアに焦点を当てたもの ((D)) を置き、その間に存在する事例と特徴を以下に挙げてみる。類似性が見られる (B) と (B'), (C) と (C') はそれぞれまとめて記す。

- (A) male typist, young / old player, beautiful pianist, etc.

動作主名詞の基となる動詞・名詞が表す概念は背景化され、人として持つ属性に焦点が当てられる。動作主名詞を man, woman, person などと入れ替えてもその人の属性として受け継がれる。The pianist is beautiful. としても意味が変わらない。

- (B) complete stranger, typical doctor, true scholar, etc.

そのカテゴリーのメンバーとしての資格がどうであるかを表す。話者にとって stranger, doctor, scholar と考えられるカテゴリーの中で、資格を十分に持つ、完全に該当する人であると言っている。

- (B') my first / former / new teacher

形容詞により、時間軸上の位置が特定されるよう

な例である (Langacker 2008: 320)。my teacher というカテゴリーの中の、いつ存在した(する)メンバーかを示すという点で、(B)との類似が見られる。

(C) nervous flier, important / influential player, etc.

flier や player としてどんな人かといったことを表す。(A)のように人としての属性のみを焦点化する場合と異なり、fly や play という動詞的概念が関わりを持つ。しかし、動詞が表すプロセスの様態について言及しているわけではなく、*fly nervously, *play importantly / influentially という概念化はできない。

(C') big liar, clever liar, good liar, terrible / poor liar, chronic liar, etc.

例えば (C) の nervous flier に関連して*nervous flight というものがないのに対し、big / clever / good / terrible lie といったものは存在する。そのような嘘をつく能力がある、liar としてどんな人かという点では (C) との共通性が見られる。chronic liar については、lie chronically と言うことも可能で、liar としての継続性・恒常性を表すという点で次の (D) に近い。

(D) heavy smoker, hard worker, fast runner, sound sleeper etc.

動詞が表すプロセスの様態を示す。smoke heavily, work hard, run fast, sleep soundly と動詞+副詞で表すこともできる。

この (A)~(D) は「形容詞+動作主名詞」を分類したものであり、それぞれの動作主名詞がどこかに属するという点ではもちろんない。例えば、eater と形容詞との共起関係を見てみよう。

(24) a. picky / fussy eater, healthy eater, light eater, big eater, competitive eater, emotional eater
b. messy eater, noisy eater

全て eater としてどのような属性を持つかという点では共通しているが、(24 a) は食べるものの選択の仕方、食べる量、食べるというプロセスがどんな(心理)状態と共に生じるか表しているのに対し、(24 b) は食べるというプロセスそのものの様態に言及している。つまり、上の分類を適用すれば、(24 a) は

(C), (24 b) は (D) に該当する。

次に speaker について考えてみよう。

(25) a. charismatic speaker

b. good / poor speaker, persuasive speaker, articulate speaker⁴⁾

c. *long / *short / *brief speaker, *boring speaker

全ての例において、普段どんな話し方やスピーチを行う人かということについて話し手が下した判断や評価を形容詞が表す。ただし、例えば speak persuasively と言えるのに対し*speak charismatically とは言わない、good / poor / persuasive / articulate speech とは言うが*charismatic speech とは言わないことから、(25 a) は話し方やスピーチを行うプロセスに注目するというよりは、その人の演説が大きな要因ではあるがそれによりカリスマ的な人気を持つ人だという、人としての属性がより焦点化されていると言える。(25 c) は、long / short / brief / boring speech というものはあるのに、同じ形容詞で speaker を修飾することはできないケースである。これらの属性は speaker ではなくスピーチに認められるものであることに起因するが、一方、(25 b) の形容詞は speech, speaker 両方と共起可能である。これらの形容詞に関しては、属性とその speaker との結びつきが (25 c) よりも定着しており、「いつもそのような話し方やスピーチをする人」と捉えられているため、共起が可能になると考えられる。

(D)はプロセスの様態を表すので、いわゆる Vendler の動詞分類の中の活動動詞 (activity verb) を基盤とする動作主名詞が多いことが予測される。loser, winner, visitor などは、動詞が表すプロセスの途中段階よりも終点に焦点が当たる動詞であるので、プロセスの様態に言及する形容詞との共起はほとんど見られない。visitor は頻度を表すもの (=26 a)、visitor を迎える側の人にとってどう受け入れられているかを表すもの (=26 b) の例が見られる。(26 c) は (26 b) の類例と言え、winner の勝利や受賞についての話し手の主観的評価を表している。(26 d) は loser や winner としての程度がどのくらいであることを示すものであり、特に loser についてはこれ以外の形容詞を伴う頻度は低い。

(26) a. frequent / occasional / rare visitor

4) COCA での検索数は persuasive speaker は 2 例、articulate speaker は 3 例と、これら 2 つの頻度は高くない。

- b. uninvited / unwelcome visitor
- c. lucky winner
- d. real / sore loser, real winner

ここで本稿の最初に挙げた「指示修飾」と「指示物修飾」の区分に戻ってみる。動作主名詞は動詞的概念を含む名詞であるので、形容詞がそれを修飾する場合には個人としての属性より、動作主としての属性を表しているものと解釈される「指示修飾」のほうが優勢である。上の分類では (A) が「指示物修飾」であるが、他は全て動詞的概念を含めた上での修飾関係が見られる。しかし、上で見たように (C) の nervous flier, important / influential player や (25 a) の charismatic speaker では、属性がその人に認められるのはそれぞれのプロセスの様態が要因だが、その人としての属性がより焦点化されていると言える。よって、形容詞の使い方は「指示修飾」「指示物修飾」に二分されるのではなく、中間的な用法の存在を認める可能性が出てくると思われる。

4. 結 語

3. 1 節で、特殊な文法的ふるまいや形容詞に近い特徴を持つ動作主名詞が存在することを確認した。さらに、動作主名詞はその内部に動詞的概念を含むという点を考えても、名詞というカテゴリーにおいて周辺的なメンバーである。3. 2 節では形容詞が動作主名詞のどの部分に焦点を当てているかによって、(A)～(D) の異なるタイプに分類した。動詞的概念が関わる (C)～(D) のタイプにおいては、動作主名詞はそれぞれの動詞が表す事態に関連するフレームを喚起する。フレーム内の異なる部分に複数の属性が認められるが、「いつもそのような属性を持ってその行為を行う人」という捉え方が可能なら、メトニミーに基づくプロファイルシフトが行われ、その属性を表す形容詞と動作主名詞との共起が可能になる。

2 節で見たように、動作主名詞による言語化は、何らかの属性を持ってその行為を「する人」または「している人」と捉えられる場合にのみ可能になる。つまり、動作主名詞はもともと継続性・恒常性とある種の属性を備えているのである。形容詞も典型的には状態的性質を表すものなので、プロファイルシフトが起こり意味的に整合すればお互いの共起は自由かつ容易に行われるのである。

3. 2 節では、形容詞が動作主名詞の形式クオリア、

あるいは目的クオリアを修飾しているということがあがるが、そのほかに中間的な事例が存在することを見た。単一の動作主名詞が使われていても、異なる形容詞との共起により、その基盤となる動詞の概念がどの程度関わってくるかが異なるのだと言える。

参 考 文 献

- Aitchison, Jean. (1994) *Words in the Mind: An Introduction to the Mental Lexicon*, 2nd edition. Blackwell Publishers.
- 安藤貞雄. (2005) 『現代英文法講義』 開拓社.
- Bolinger, Dwight. (1967) "Adjectives in English: Attribution and Predication," *Lingua* 18, 1-34.
- Evans, Vyvyan and Melanie Green. (2006) *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- 影山太郎. (2002) 「動作主名詞における語彙と統語の境界」『国語学』第 53 卷 1 号, 44-55.
- 岸本秀樹・菊池朗. (2008) 『叙述と修飾』 研究社.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.
- 宮島達夫. (1997) 「ヒト名詞の意味とアスペクト・テンス」川端善明・仁田義雄 (編) 『日本語文法: 体系と方法』 157-171. ひつじ書房.
- 西村義樹・野矢茂樹. (2013) 『言語学の教室 哲学者と学ぶ認知言語学』 中央公論新社.
- 小野尚之. (2005) 『生成語彙意味論』 くろしお出版.
- 大沼雅彦. (1968) 『性質・状態の言い方/比較表現 英語の語法表現篇第 3 巻』 研究社.
- Pustejovsky, James. (1995) *The Generative Lexicon*, The MIT Press.
- Radden, Günter and René Dirven. *Cognitive English Grammar*, John Benjamins Publishing Company.
- Roeper, Thomas. (1987) "Implicit Arguments and the Head-Complement Relation," *Linguistic Inquiry*, Volume 18, Number 2, 267-310.
- Taylor, John R. (1998) "Syntactic Constructions as Prototype Categories," *The New Psychology of Language*, ed. by Tomasello, Michael, 177-202, Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- . (2002) *Cognitive Grammar*. Oxford University Press.
- . (2012) *The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*. Oxford University Press.
- Vendler, Zeno. (1968) *Adjectives and Nominalizations*, Mouton.
- 安井稔・秋山怜・中村捷. (1976) 『形容詞 (現代の英文法 7)』 研究社出版.

例文出典

COCA (Corpus of Contemporary American English)

LDOCE : *Longman Dictionary of Contemporary English*,
Fifth Edition, 2009

Fudge-a-Mania, by Judy Blume, Puffin Books., 1972

Superfudge, by Judy Blume, Puffin Books., 1972

Tales of a Fourth Grade Nothing, by Judy Blume, Puffin
Books., 1972